

2019.8.11 年間第19主日

目を覚ましているしもべ

ルカによる福音書 12:35-40

「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

説教

「腰に帯を締め」という表現は服装に注意して乱れのないように身支度を整えなさい、ということです。キチンとした身なりで、主人の帰りがどんなに夜が遅くなくても照明、ともし火をつけて待っていなさい、とっています。続けて、主人が帰ってきて戸をたたいたら、すぐに開けましょうとっています。そうすれば主人に褒められて、主人が給仕までしてくれるという、とてつもないほどの幸運に恵まれる、とルカはいいます。逆にいえば、起きていないしもべ、主人の帰りがあまりにも遅いので寝てしまうようなしもべは主人にどう思われても知らないよ、ということかもしれません。

泥棒と同じように「人の子」はやってくる、つまりキリストの再臨は思いがけない時にくる、ということでしょう。イエスの処刑後、エルサレムの隠れ家に集まっていた弟子たちの中に復活のイエスは「シャローム」あなたがたに平和がありますように、と挨拶され、そして主はドアが閉まっているのにいつのまにか去っていかれました。そんなイメージ、どこからともなく忍び

寄るイメージが再臨のキリストに重ねられているのかもしれませんが。

迫害され洞穴の中で礼拝をしていたキリスト信者たちが希望をもってキリストの再臨を待ち望んでいる、昼間は生活のために働いた人たちが、疲れたからだをひきずり夜になって、秘密の会堂に集まり賛美をして聖書のことばを聞いている、そんなときにこの福音、ルカ 12 章が朗読されたと想像してみましょう。

「みなさんの中には身なりにまで気を配れない方もいるかもしれませんが。主は腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい、といわれました。そのみ言葉を振り返って自分を見つめなおす時、わたしたちは自分の服のことを気にするのでしょうか、自分の帯のほつれを気にするのでしょうか。そうではない、仮に帯にほつれがあり、擦り切れていようところの中の帯はキッチリ締めています。ともし火をともしていなさい、と命じられるとき、会堂の火皿の油はもうのこり少なくなっているかもしれません。たとえ、ともし火が消えかかっていたとしても、わたしたちの心のともし火は赤々と燃え上がっています。みんなでここをあわせて主の再臨を待ち望みましょう。いまがどんなに苦しくても希望をもって待ち望みましょう」とその日の説教者はこんな励ましを語っていたのではないのでしょうか。

わたしたちも、自分自身を振り返り、帯を締め、ともし火を灯し、主の再臨を待ち望む者とされるように祈りましょう。
